琉球大学学術リポジトリ

教員志望学生を対象にした「教育実践ボランティア」活動の11年

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2008-04-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 平田, 幹夫, Hirata, Mikio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5567

教員志望学生を対象にした「教育実践ボランティア」活動の11年

平　田　幹　夫*

The Practice Study of 'Kyoiku-Jissen Volunteers' in the Teacher Training Program in 11years

Mikio HIRATA

〔はじめに〕

「教育実践ボランティア」事業は、平成８年の10月にスタートし、平成18年度で11年目になる。教育実践ボランティアがどのような背景のもとで行われたかをはじめに述べてみたい。

平成５年から平成７年にかけては、中高生徒のいじめによる自殺者の続出や不登校の増加等が問題になっていた。このような問題に対応するために、平成７年度には、児童生徒にカウンセリングをおこなったり、教師、保護者に助言をおこなったりするスクールカウンセラーが、全国で154校にはじめて配置された「スクールカウンセラー元年」の年でもある。一方、教員研修の在り方等にも変化が見られた。講義中心の受け身の研修形態から、参加型の研修形態へと変化していった。当時の文部省が行っていた教職員等中央研修講座においても事例研究法を取り入れた実践的な参加型の研修を行うようになり、都道府県等においても実践的な参加型の研修会が行われるようになった。また社会から教師の子ども理解と実践的指導力、また学校の危機管理等が問われた時期でもあった。

一方、平成８年７月の第15期中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の第一次答申（1996）では、これからの教員には「生きる力」を育む学校教育を展開するための実践的指導力とその基盤となる幅広い豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力を求めた。また、教育職員養成審議会（以後教養審）は平成８年７月29日に文部大臣から「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」の諮問を受け、「教員養成課程のカリキュラムの改善について」が検討事項の一つとして挙げられた。特に子どもの実態を的確に把握でき、子どもにやる気を起こさせ、人間としての生き方を指導できる実践的指導力を育成できるような教員養成課程のカリキュラムつくりが求められた。その中で、教育実習の期間・内容等の見直し、教員志望学生が児童生徒とふれ合う機会の充実の検討が求められた。

以上のことを踏まえ、琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター（改組後教育実践総

*琉球大学教育学部

合センター）は、平成８年から２年間、文部省「教員の実践的指導力の向上に係る教育方法等に関する開発研究費」による研究プロジェクトによる補助を受け、教員志望学生を県教育委員会、市町村教育委員会、学校、児童福祉施設等と連携・協力し、学生の空き時間を担任の授業の補助員として、また、学生を夕方の時間帯に児童養護施設等に派遣する「教育実践ボランティア」事業を開始した。

全国でも初めての試みであったこの取り組みは、平成９年の教養審の第一次答申の中でも「多様な実習機会の確保必修部分を超えるもの」の項目で「・・・学校・教育委員会・大学の連携による子どもたちとの合宿・交流事業の実施、教育委員会の協力により教員を志願する者が毎週学校の授業等の補助を行う試みなど、近年、教職課程において様々な取り組みが工夫されている」と取り上げられた。平成８年度に立ち上げた「教育実践ボランティア」活動は、ある意味においては教養審の答申を先取りした取り組みであった。

平成８年に24人の学生が浦添市内の４小学校21学級と１児童養護施設に11人が教育実践ボランティアとして派遣された。当時は、まだ教師の側に自分の授業を見られることに対する抵抗感がかなり強かった。外部の人をボランティアとして授業で活用するという意識は学校現場にはあまりなかった。学校に何回も出向き、学生を教師の補助員として活用するメリットを説明し、知り合いの教師にバックアップしてもらい４校21学級で教育実践ボランティアがスタートした。児童養護施設派遣については、スムーズに行われた。

この11年間で1698人の学生が教育実践ボランティアとして、11月から４ヶ月間、毎週、決められた時間に決められた曜日・時間・学級に、学級担任の補助員として、児童福祉施設では特定の子どものメンタルフレンドとして子どもたちと関わった。その活動の取り組みは、子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践（1996, 1997）及びフレンドシップ報告書（1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006）としてまとめられ、県及び各市町村教育委員会、受け入れ先学校・児童養護施設、そして参加学生に配布されている。現在は、教育実践ボランティアの取り組みも県内に認知されていて、学生が時間的にも距離的にも通えないような地域の学校や教育委員会からの派遣要請もかなりある。

次に、「教育実践ボランティア」活動の11年間の実践について報告し考察していきたい。

〔教育実践ボランティアとは〕

(1) 目　的

将来教師を目指している学生が、講義の空き時間や夜の時間帯を利用し週１回を原則として決められた曜日の決められた時間に、学校や適応指導教室及び児童養護施設等で子どもと関わりふれ合う中で、「子ども理解」と「実践的指導力」の向上を図ることをねらいとする。　①学校においては、授業の中で担任の補助員として、また、子どもたちの学習指導やメンタルフレンドとして関わる。②適応指導教室や教育相談室においては、メンタルフレンドとして主に関わる。②児童養護施設では、放課後の子どもたちのメンタルフレンド及び学習指導に関わる。

いずれの場合も、「子どもに何かをしてあげること」を目的とするのではなく、「子どもから学ぶ」という視点に立ち、子どもと関わることを目的としている。

(2) 内　容

教育実践ボランティアの企画運営は、学生（10人程度）で組織する「教育実践ボランティア実行委員会」が行っている。学生の募集は、「今、教師を目指す君の情熱を、学校現場で活かしてみないか」というポスターを全学部に張り出し呼びかけをおこなっている。特に応募できる学年を制限していない。また、平成10年より「教育実践ボランティア」という科目としても提供されている。教育学部については「教科及び教職に関する科目」（２単位）として、他学部については「自由科目」（２単位）として

いる。活動期間は、原則として11月から２月末日までの４ヶ月間である。

学生が安心して活動ができ、学校等が安心して活用できるように、参加学生には「琉球大学学生教育研究災害保険」あるいは「ボランティア保険」等の加入、また、自動車等の任意保険の加入を義務づけている。

(3) 子ども理解と実践的指導力を高める手だて

①オリエンテーションで子ども及び教師との関わり方についての指導を行う。

②子どもの言葉から、何を感じ、何を学んだかを簡単に考察し記録する「日々の記録」を毎回書かせる。

③学生全員が参加する中間報告会と最終報告会で学生の実践発表を行い、課題や成果の共有化を図り、今後に活かすようにする。この時の指導助言及び個別の相談等は教育実践総合センターの教員が行う。

〔教育実践ボランティア派遣状況〕

(1) 派遣市町村数

Ｈ８年度からH18年度までの、教育実践ボランティアを受け入れた市町村数と学校等（学校・適応指導教室・児童養護施設）の数をまとめたのが表１である。受け入れ市町村の数はＨ８年度からH15年度まで増加傾向にあり、その後は９市町村で安定している。特別に派遣する場合が毎年、１市町村程度ある。安定的に学生を派遣できる地域は８市町村である。これ以上広げると、学生の学業に支障をきたすことが予想される。

同様に派遣できる学校等も派遣市町村の数を考慮に入れると表１から33校程度が限界でるあると考える。

表１．年度別受け入れ市町村数・学校数

	Ｈ８	Ｈ９	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18
市町村の数	2	5	4	5	7	5	6	9	9	8	9
学校等の数	5	11	14	19	23	23	27	28	33	34	32

(2) 年度別実質参加人数

教育実践ボランティアに参加した実質人数（図１）は、Ｈ８年度24人、Ｈ９年度37人、H10年度74人、H11年度106人、H12年度113人、H13年度133人、H14年度165人、H15年度198人、H16年度186人、H17年度128人、H18年度人であった。H16年度をピークに減少している。

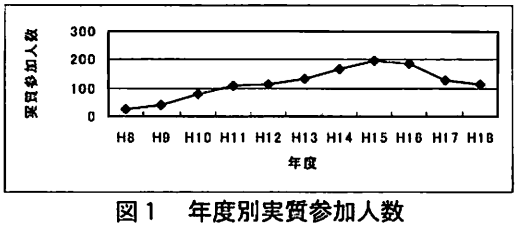

図１　年度別実質参加人数

(3) 参加学生の学部別人数

表５は教育実践ボランティアに参加した学生の学部別人数である。Ｈ８年度は参加学生の100％が教育学部の学生であった。この年は

表２．参加学生の学部別人数　（人、（%））

区分		Ｈ８	Ｈ９	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18
学部	教育	24 (100)	34 (91.9)	69 (87.3)	88 (83.0)	78 (69.0)	105 (78.9)	127 (77.0)	145 (73.2)	140 (75.3)	110 (85.9)	97 (85.9)
	法文	- -	2 (5.4)	3 (3.8)	3 (2.8)	7 (6.2)	10 (7.5)	20 (12.1)	10 (5.1)	29 (15.6)	12 (9.4)	10 (9.4)
	工学	- -	1 (2.7)	- -		- -	- -	- -	5 (2.5)	2 (1.1)	1 (0.8)	- (0.8)
	理学	- -	- -	- -	- -	24 (21.2)	15 (11.3)	15 (9.1)	28 (14.1)	11 (5.9)	4 (3.1)	2 (3.1)
	医学	-	- -	7 (8.9)	3 (2.8)	4 (3.5)	3 (2.3)	- -	1 (0.5)	2 (1.1)	1 (0.8)	2 (0.8)
	農学	- -	- -	- -	- -	- -	- -	3 (1.8)	5 (2.5)	2 (1.1)	- -	- -
参加学生		24	37	79	106	113	133	165	198	186	128	111

「教育実践ボランティア」元年にあたり、教育学部の学生を対象にポスターで参加を呼びかけた。H９年度からは、教師を目指している他学部の学生にも範囲を広げた。その結果、教育学部の学生が91.9%、法文の学生が5.4%、工学部の学生が2.7%を占めた。H10年度は、教育学部87.3%、法文学部3.8%、医学部（保健学科で養護教諭を目指している学生）8.9%を占めた。H11年度は、教育学部83.0%、法文学部2.8%、医学部2.8%を占めた。H12年度は、教育学部69.0%、法文学部6.2%、理学部21.2%、医学部3.5%を占めた。11年間で教育学部の占める割合が一番低い年度である。H13年度は、教育学部78.90%、法文学部7.5%、理学部11.3%、医学部2.3%を占めた。H14年度は、教育学部77.0%、法文学部12.1%、理学部9.1%、農学部1.8%を占めた。H15年度は、教育学部73.2%、法文学部5.1%、工学部2.5%、理学部14.1%、医学部0.5%、農学部2.5%を占めた。H16年度は、教育学部75.3%、法文学部15.6%、工学部1.1%、理学部5.9%、医学部1.1%、農学部1.1%を占めた。H17年度は、教育学部85.9%、法文学部9.4%、工学部0.8%、理学部3.1%、医学部0.8%を占めた。H18年度は、教育学部85.9%、法文学部9.4%、工学部0.8%、理学部3.1%、医学部0.8%を占めた。

(3) 派遣先数・派遣延べ人数と学級等の応募数

H16 年度までは派遣先数及び派遣延べ人数とも、H15年度を除いてほぼ右肩上がりで増えていた（表３、図１）。しかし、H16年度に比べて派遣先数でH17年度は31.2%減、H18年度は29.9%減、派遣延べ人数でH17年度は27.5%減、H18年度は32.4%減であった。しかし、教育実践ボランティア派遣の応募数は、年度ごとに増加している。このことは、学校現場等ではボランティア学生の必要度が年々高まっていることがわかる。Ｈ８年度からH16年度までは学校等から応募してきた応募数の全てに派遣できたが、H17年度は応募数の30%、H18年度では44.9%の学級等に派遣できなかった。教育実践ボランティア参加学生数を増やす方策を考えなければこの問題は解決できない。

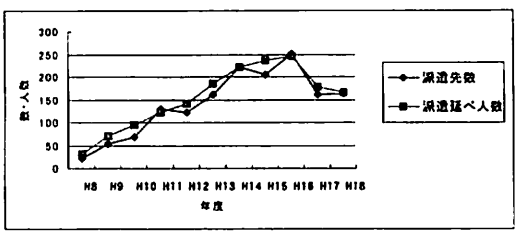

図２．度別派遣先数と派遣延べ人数

表３．派遣先数と派遣延べ人数

		H８	H９	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18
小学校	1年生	3	6	11	24	13	22	40	32	29	12	11
	２年生	1	7	11	10	17	25	47	39	49	30	26
	３年生	8	4	5	23	31	27	31	24	32	29	28
	４年生	1	8	9	16	19	29	33	34	40	26	25
	５年生	2	4	12	26	16	24	24	32	36	26	28
	６年生	6	18	13	23	19	26	35	34	30	30	33
	特殊学級	-	-	2	6	5	4	10	7	7	5	9
	保 健 室	-	-	2	1	1	-	-	2	1	-	1
適応指導教室		-	-	-	-	-	1	1	1	1	1	1
児童養護施設		-	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
中学校	中学校	-	5	2	-	-	-	-	-	4	-	-
	相談室	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
若夏学園		-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
幼 稚 園		-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
派遣先数		21	53	68	130	122	160	222	206	234	161	164
派遣延べ人数		32	70	94	123	142	185	222	237	247	179	167
応募数		32	70	94	123	142	185	222	237	247	256	303

(4) 単位登録学生の状況

教育実践ボランティアは平成８年度・９年度は、授業科目として登録していなかった。しかし、平成10年度より、教育学部については「教科及び教職に関する科目」（２単位）の中に位置づけ、他学部については「自由科目」（２単位）として位置づけた。

Ｈ８年度からH15年度までは、参加学生数は増加傾向にある。また、参加学生数に占める単位登録者数の割合も増加傾向にある。しかし、平成17年度は16年度に比べて参加学生数が58人減になっている。その内の53人は単位登録学生の減である。これは、本学が17年度から履修登録がWEB登録に変更になった時期と単位登録学生の減が一致することから、WEB登録が単位登録学生の減の要因の一つだと考えられる。

また、H17年度より、１年次で教職体験Ⅰ（附属学校）、H18年度より２年次で教職体験Ⅱ（公立学校）が選択科目として新たに設けられたことが何らかの影響を与えている可能性もある。また、単位登録学生以外の参加者のほとんどは、リピーターの学生である。

単位登録の学生の中で、単位不可の学生が平成10年度から平成18年度の９年間で68人にいた。これは、単位登録学生の8.4%になる。その中でも、教育実践ボランティアを途中リタイアして学校に迷惑をかけた学生は11年間でも６人であった。残りの62人の単位不可の学生は、日々の記録の未提出や２回の報告会に不参加による単位不可であったが、派遣された学校へは教育実践ボランティアとして最後まで参加していた学生である。

〔平成18年度教育実践ボランティアに関するアンケート調査〕

ここでは、平成18年度教育実践ボランティアの評価のためにアンケート調査を実施し、今後の教育実践ボランティアに活かしていくことを目的とする。

調査対象

平成18年度最終報告会に出席した学生61人（男子23人、女子38人）

学年：１年15人、２年22人、３年16人、４年８人

調査時期

平成19年２月10日、教育実践ボランティア最終報告会終了直後に実施。

調査内容

①教育実践ボランティアに関する17の質問項目からなる質問紙を作成し、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の４件法で回答を求めた。

②自由記述回答を求めるもの

教育実践ボランティアに参加して、とくに困っていることがあればどんなことですか」「ボランティア活動を通して、将来教師になるために、今の自分に足りないものは何だと思いますか」「最終報告会に参加してのご意見・ご感想をお書きください」という３項目について自由記述回答を求めた。

表３．単位登録学生内訳

区　分	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18
参加学生数	24	37	79	106	113	133	165	198	186	128	111
単位登録人数	-	-	27	60	61	82	123	145	132	79	98
			(34)	(57)	(54)	(62)	(75)	(73)	(71)	(62)	(88)
単位不可人数	-	-	-	-	-	2	8	15	15	14	14
						(2.4)	(6.5)	(10)	(11.4)	(18)	(14)
途中リタイア人数	-	-	-	1	-	1	-	-	1	1	2

結果と考察

有効回答数は、61人(有効回答率100%)であった。

(1)「将来教師になりたいという気持ちが強くなった」の質問項目に対して、「とても思う」(54%)と「まぁまぁ思う」(39%)を合わせると、93%の学生が教育実践ボランティアに参加して教師になりたいという気持ちが強くなったと認知していることが分かる(図3)。

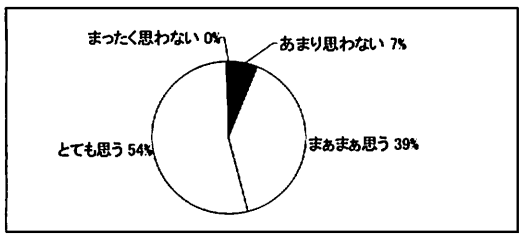

図3．将来、教師になりたいという気持ちが強くなった

(2)「子どもの言葉や表情、行動の意味を考えるようになった」の質問項目に対して、「とても思う」(80%)と「まぁまぁ思う」(20%)を合わせると、全ての学生が教育実践ボランティアに参加して、子どもの言葉や表情、行動の意味を考えるようになったと認知していることが分かる(図4)。

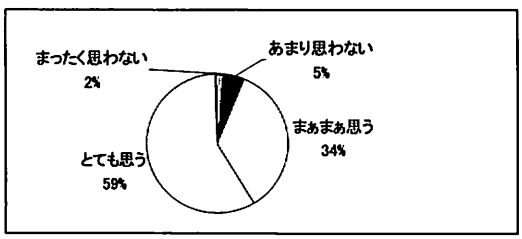

図4．子どもの目線になって考えるようになった

(3)「子どもに対する見方や考え方が変わった」の質問項目に対して、「とても思う」(48%)と「まぁまぁ思う」(47%)を合わせると、95%の学生が教育実践ボランティアに参加して、子どもに対する見方や考え方が変わったと認知していることが分かる(図5)。

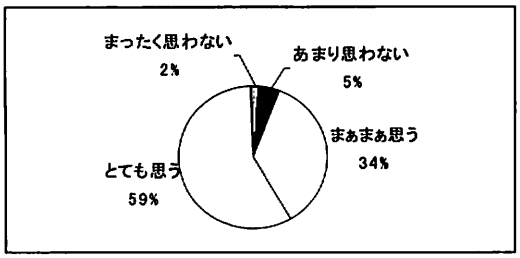

図5．子どもに対する見方や考え方が変わった

(4)「子どもの目線になって考えるようになった」の質問項目に対して、「とても思う」(59%)と「まぁまぁ思う」(34%)を合わせると、93%の学生が教育実践ボランティアに参加して、子ども目線になって考えるようになったと認知していることが分かる(図6)。

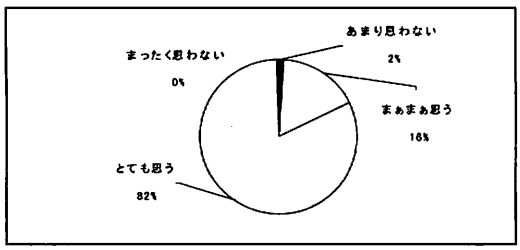

図6．子どもの目線になって考えるようになった

(5)「子ども一人一人を大切にしたいという気持ちが強くなった」の質問項目に対して、「とても思う」(82%)と「まぁまぁ思う」(16%)を合わせると、98%の学生が教育実践ボランティアに参加して、子ども一人一人を大切にしたいと認知していることが分かる(図7)。

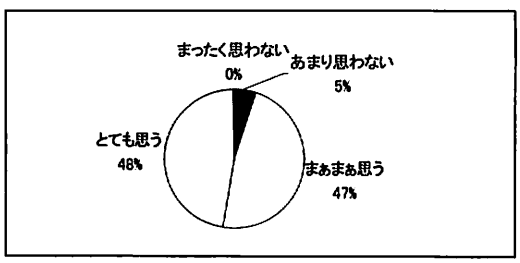

図7．子ども一人一人を大切にしたいという気持ちが強くなった

(6)「教育実践ボランティアに参加することによって講義に差し障りがあった」の質問項目に対して、「とても思う」(15%)と「まぁまぁ思う」(2%)を合わせると、17%の学生が教育実践ボランティアに参加することによって講義に差し障りがあったと認知していることが分かる(図8)。最大限の配慮はしたつもりであるが、今後、運営側に問題があるのか、学生の側あるいは受け入れ先に問題があるのかを検討し改善していきたい。

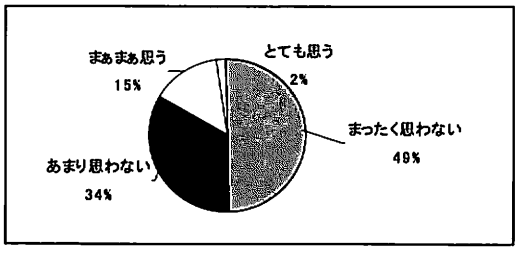

図8. 教育実践ボランティアに参加することによって、講義に差しさわりがあった

(7)「教育実践ボランティアへの参加は教員採用試験に役立つと思う」の質問項目に対して、「とても思う」(34%)と「まぁまぁ思う」(46%)を合わせると、80%の学生が教育実践ボランティアに参加することは、教員採用試験に役立つと認知していることが分かる(図9)。

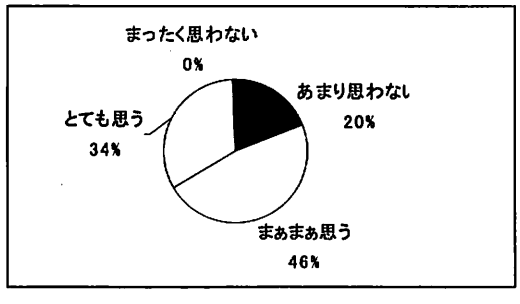

図9. 教育実践ボランティアへの参加は教員採用試験に役つと思う

(8)「今、自分は教育実践ボランティアの活動に満足している」の質問項目に対して、「とても思う」(45%)と「まぁまぁ思う」(33%)を合わせると、78%の学生が教育実践ボランティアの活動に満足していると認知していることが分かる(図10)。

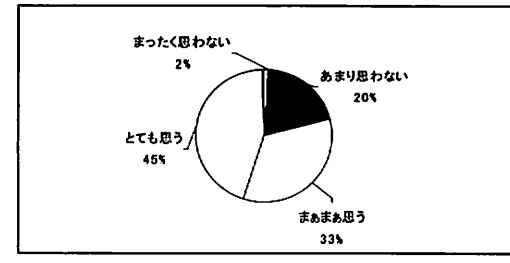

図10. 今、自分は教育実践ボランティアの活動に満足している

(9)「教育実践ボランティアを途中でやめたくなったときがあった」の質問項目に対して、「とても思う」(7%)と「まぁまぁ思う」(25%)を合わせると、32%の学生が教育実践ボランティアを途中でやめたくなったことがあったことが分かる(図11)。この結果を次の図12の結果(97%の学生が教育実践ボランティアに行く日を楽しみにしている)と比較して考えると、一時的なものであったことが考えられる。

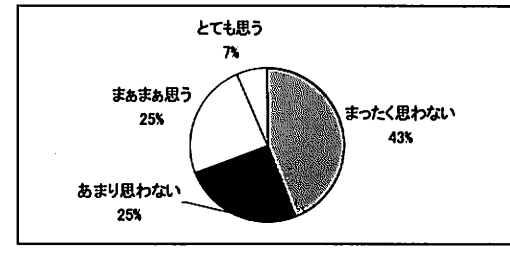

図11. 教育実践ボランティアを途中で止めたくなったときがあった

(10)「教育実践ボランティアに行く日は楽しみだった」の質問項目に対して、「とても思う」(48%)と「まぁまぁ思う」(49%)を合わせると、97%の学生が教育実践ボランティアに行く日を楽しみにしていたことが分かる(図12)。

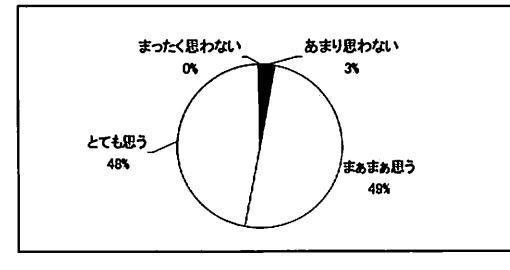

図12. 教育実践ボランティアに行く日は楽しみだった

(11)「子どもとの関係はうまくいった」の質問項目に対して、「とても思う」(25%)と「まぁまぁ思う」(65%)を合わせると、90%の学生が教育実践ボランティアに参加して、子どもとの関係はうまくいったと認知していることが分かる(図13)。一方、自由記述では子どもや教師との関係で悩んだ学生が複数見られた。

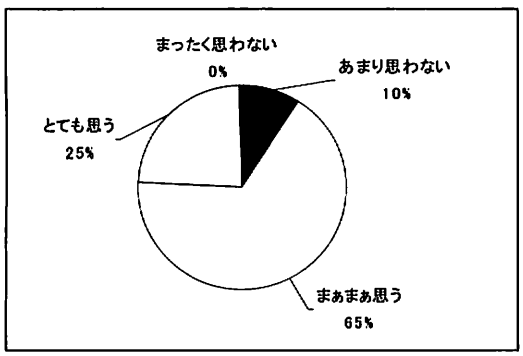

図13. 子どもとの関係はうまくいった

(12)「子どもと休み時間などによく遊んだ」の質問項目に対して、「とても思う」(30%)と「まぁまぁ思う」(39%)を合わせると、69%の学生が子どもと休み時間などでよく遊んだと認知していることが分かる(図14)。この結果は、派遣する側からすると高い数値であると認識している。子どもと休み時間等に遊びたくても、講義に間に合わせるためにすぐに帰らなくてはならない物理的状況で厳しい学生が多くいるからである。また、自由記述においても、子どもと遊ぶ時間をとることが物理的に不可能で残念という意見もあった。

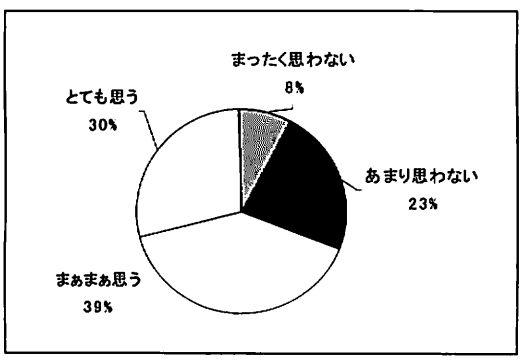

図14. 子どもと休み時間などに、よく遊んだ

(13)「子どもから学ぶことが多い」の質問項目に対して、「とても思う」(77%)と「まぁまぁ思う」(21%)を合わせると、98%の学生が教育実践ボランティアに参加して、子どもから学ぶことが多いと認知していることが分かる(図15)。この結果は、教育実践ボランティアの目的がほぼ達成されていると考えられる。

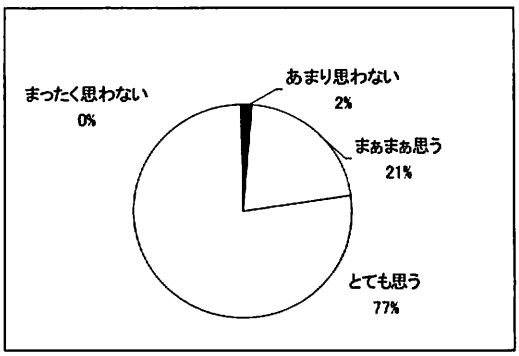

図15. 子どもから学ぶことが多い

(14)「担任(施設の職員)と意志の疎通はうまくいっている」の質問項目に対して、「とても思う」(26%)と「まぁまぁ思う」(49%)を合わせると、75%の学生が担任や施設の職員と意思の疎通がうまくいっていると認知していることが分かる(図16)。筆者や実行委員の学生に対して、どのように意思の疎通を図ればいいのかと相談する学生が活動中頃によくある。自由記述でも時間の問題や学級での流れのなかで、教職員と話す時間がなかったことについての悩みも見られた。

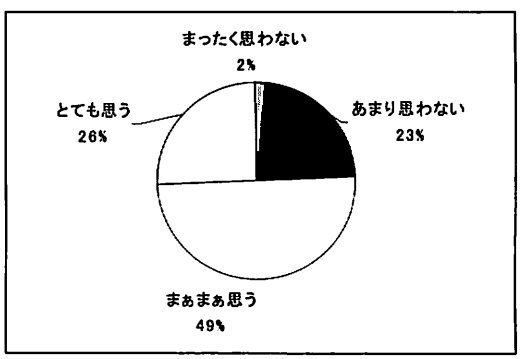

図16. 担任（施設の職員）と意思の疎通はうまくいっている

(15)「教師という職業は思っていた以上に大変である」の質問項目に対して、「とても思う」(63%)と「まぁまぁ思う」(34%)を合わせると、97%の学生が教育実践ボランティアに参加して、教師という職業は思っていた以上に大変であると認知していることが分かる(図17)。参加学生との雑談の中でも学校現場に入って初めて教師の仕事の多さに驚いたと話す学生が多い。

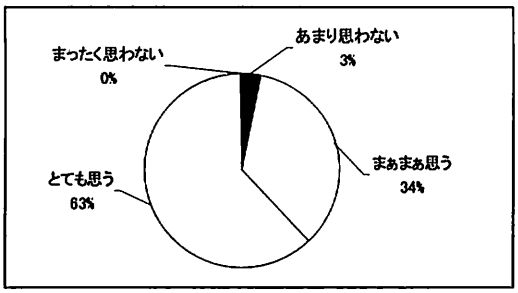

図17. 教師という職業は考えていた以上に大変である

(16)「教師という仕事は生き甲斐を感じる」の質問項目に対して、「とても思う」(52%)と「まぁまぁ思う」(43%)を合わせると、98%の学生が教育実践ボランティアに参加して、教師という仕事は生き甲斐を感じる認知していることが分かる(図18)。

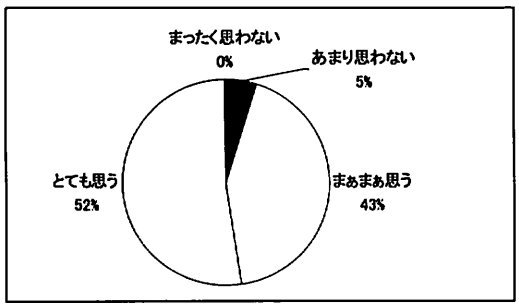

図18. 教師という職業は生きがいを感じる

(17)「ほかの学生にも教育実践ボランティアへの参加を勧めたい」の質問項目に対して、「とても思う」(58%)と「まぁまぁ思う」(39%)を合わせると、97%の学生がほかの学生にも教育実践ボランティアへの参加を勧めたいと認知していることが分かる(図19)。

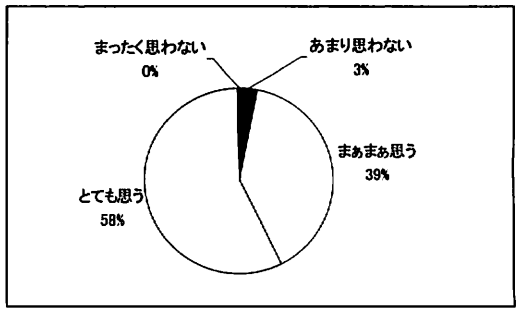

図19. ほかの学生にも教育実践ボランティアへの参加を勧めたい

(18) 自由記述回答

教育実践ボランティアに関する3項の内容について、自由記述で回答を求めた。回答を分類したものを以下に示した。

(1) 教育実践ボランティアに参加して困ったこと

① 派遣先学級担任との関係

- 休みや授業変更等の連絡があまり入ってこなかった。
- 担任の先生と打ち合わせする時間が取れなかったので、授業等の打ち合わせがうまくいかないことがあり、コミュニケーションをとることが少し難しかった。
- 担任の先生は休み時間も忙しく、事務的(必要最小限)な会話しかできなかった為、自分が迷惑をかけていないか、もっとできる事がないか等で悩むことがあった。
- 単位を必要としている学生とそうではない学生がいるために、教育実習と同等に考えている先生がいたりしたので困ったことがあった。
- 担当教員の子どもへの接し方や指導方法に違和感をもつことがあった。
- 職員室で休み時間に毎回、コーヒーを出されどう断っていいのか分からなかった。また、何か失礼なことはしていないか気になった。
- 「LD児の子と関わってください」と担任から言われたときに、すべての責任を任された気がして困惑した。

② ボランティアとしての立場・役割

・学級内で仲間はずれのようないじめがあっても、どこまで関わっていいのか悩んだ。
・体育の授業で、「TT の形でおねがいします」と言われたが、どこまでで介入すればよいのか困った。
・自分の立場は先生なのか学生なのかが曖昧で、どこまで子どもと関わればいいのか悩んだ。

③ 物理的な問題

・１時間目にボランティアで、2限目に大学の授業があり、1時間目が終わり次第、帰らなければならず、生徒と接する時間が全くなかった。
・今回、３クラスを担当したので、休み時間に次のクラスへの移動があったため、生徒とあまり関わることができなかった。
・毎校時違うクラスをまわることになり子どもたちと関わることに苦労した。
・週に１時間だけだったので、仲良くなるのに時間がかかった。仲良くなってきたころには、ボランティア終了だった。

④ 子どもとの関わり

・授業中に子どもに「教えてほしい」と言われた時に、先生が説明していたので「今は待ってね、先生の説明を聞いてみよう」と言っても、「今知りたい！」と言われてどう対応したらいいのか困った。
・１時間目と２時間目で、隣どうしのクラスを持っていたため、休み時間にどのクラスの子と遊んだらいいのか、最初の頃すごく迷った。
・四方八方から話しかけられた場合に、全員に対応しきれず、何人かが「もう、いいよ」と言われてしまい困った。
・高学年の女子と話すときに、どのような話題をどこまで話すればいいのかとても悩んだ。
・高学年の男子は話しかけても話さない子もいて、どう接すれば良いかわからず戸惑ってしまった。
・どのように教えたらいいのか困った。
・自分から子どもに話しかけることができず、関係を前進させることができず残念だった。
・軽い障害をもつ子どもへの接し方（自閉症の子どもへの接し方など）がまったくわからず困った。
・算数が苦手な特定の子だけに関わったが、どのように支援していけばよいか分からなかった。
・子どもに「どっか遊びに連れていって！」とよく言われ、学校外での子どもとの関わりは禁止されているので、どのように断ればいいのか困った。
・授業で担任の補助員として何をしていいのか分からない時が最初のころあった。
・ボランティアの後半は授業に参加せずに、学校の掲示物作りをたのまれて別の教室で作っていたが、子どもと関わる時間がかなり少なくなったので、どこまで引き受ければいいのか悩んだ。
・ボランティアで自信を無くしそうになったとき、教職をあきらめようかと迷ったことがあった。
・名前を覚えられなかったので、名簿があるといいと思う。

⑤ 教育実践ボランティアの報告会に参加しての感想

・みんなの感じた点がこれからの自分の考え方に大きく影響してくると思った。非言語コミュニケーションを大事にしたい。
・報告会では特殊学級の話など興味のある話も聞けたり、自分と同じ意見の人もいてすごく共感できてよかった。
・発表を聞いて、他の人も同じ悩みを持っていたことが分かり少し安心した。
・適応指導教室や、保健室などの話も聞けて、自分が体験したこととは違う内容のものが多く新たな発見があった。
・LD 児への関わり方が参考になった。

・教科書や講義だけでは感じることのできないことが沢山あった。自分に時間のゆとりがあれば、もっといろいろなことができたような気がする。
・子どもの「ウザイ、キモイ」という言葉をそのまま受け取らないようにというアドバイスが参考になった。また、気楽な気持ちで子どもと接する距離感も大切だと思った。
・他の人の意見や経験を聞けて良かった。自分の考えと似ているところや、逆にそこは違うんじゃないのかなと考えながら聞けてよかった。
・報告会で意見を共有できるので、とても役に立った。代表者の意見を聞くことで、自分のフィードバックも繋がり、とてもよかった。
・たくさんの学生の話が聞けてとても貴重な時間となった。「キモイ」とか「ウザイ」などという言葉は、私はいつも最高のほめ言葉だと感じながら接していた。本当に関わりたくないなら、そういう言葉も発さないと思うし、本当は関わりたいから「おはよう」のようなあいさつ感覚で言っていると思う。「キモイ」は「気持ちいい」の略語だと思っている。
・私とは違う学年や、様々な施設へボランティアに行っている人の話が聞けて、とても勉強になった。私と同じような事を感じている人や、障害児をみていた人、不登校な子をみていた人の話など、とてもためになった。教師というのは、本当に多くの視点から物をみる能力が必要だと思った。
・一人では気づけなかった学びを、様々な意見を聞くことで再び再確認できた。
・適応教室というのを初めて聞いた。何をしているのか、どんな子がいるのかなど、いろいろな視点から体験談を聞くことができてよかったです。
・中間報告会・最終報告会などにおいて、自分が経験していない学校現場の様子や実態なども聞くことができ、さらに考えを深めることができてとても勉強になった。

⑥ 教育実践ボランティアに参加しての感想

・とてもいい経験ができた。楽しいこともつらいこともたくさんあったが、今は非常に満足している。来年度のボランティアにもぜひ参加したいと思う。
・この実践ボランティアに参加して、子どもたちとふれ合うことによって、教師になるために足りないもの、教え方、遊び方など色々と学ぶことが多かった。参加してよかった。
・とても有意義な時間となり、もっと自分の将来について真剣に考えていきたいと思った。
・大変だったけど、教師になるためには絶対必要なのでこれからも頑張っていきたい。
・教師になりたいという思いが一層強くなった。３月いっぱいまでボランティアをやっていきたい。
・楽しく子ども達と接することができ、特に１年生は明るくてかわいくて、ボランティアに行くのがとても楽しみだった。来年度は、児童養護施設にも行ってみたい。
・実際に現場に少しでも関わることができたのは、将来教師を目指している自分にとってはとてもいい経験ですごくよかった。
・教育実習前に実践ボランティアに参加して学校現場に慣れることができてよかった。教職が自分に向いているのかを見極めたかった。日がたつにつれて子どもが好きになれて良かった。
・３年次教育実習では普通学級だったので、今回は特殊学級に配属されたので、初めてのことが多く戸惑うこともあったが大変有意義なものだった。
・やはり大学の講義だけでは学び得ることができない多くの事をこのボランティアを通して体験し学ぶことができたので良かった。この経験を教師になったときに生かしていきたい。
・今回で３回目の参加になるのですが、毎回子どもたちからパワーをもらったり、逆に自分自身子どもたちから学ぶことがあり、とても良い経験ができたと感じた。子どもたちとの接し方や関わり方について悩むこともあった

が、それを次に活かしていきたい。

・友人で、このボランティアに興味はあるけど忙しくて参加できない人もいたので、報告会への一般参加も呼びかけた方が良いよかった。この報告会を聞くだけでも勉強になるし、これをきっかけにボランティアへ参加する学生も出てくるのではないかと思う。

・準備など大変な時間と労力を費やしてくださっている先生や実行委員の方に感謝である。

〔おわりに〕

平成８年10月に「今、教師を目指している君の情熱を、学校現場で活かしてみないか」という呼びかけから始まった教育実践ボランティア事業が平成18年度で11年目を迎えた。平成8年に24人の学生で始まった教育実践ボランティアも今では、多いときで約200人の学生が参加する規模になっている。そして、学校現場等からの教育実践ボランティア派遣要請が300人を超えるまでになり、それに対応できな状態になりつつある。

学校現場では教師の意識改革が進み、多くの人の手を借りて子どもたちを教育していかなければ、多様化した子どもたち（特別支援を要する子ども等）に対応できないことを教師が気づき始めている。

一方、教員養成段階における学生の子ども理解と実践的指導力を高めるためには、学校現場に出向いて、子どもたちとふれ合う機会を多く作ることが必要である。将来教師を目指す多くの学生が教育実践ボランティアにリピーターとして何回も参加したくなるような魅力ある取り組みと、単位登録もし易いような環境整備を行っていく必要がある。ここで、２つの提案をしたい。

① 教育実践ボランティアを集中講義として位置づける

本学部においては、学生は半期に履修できる単位数が25単位として決められているために、登録後に単位オーバーを理由に取り消す学生が多い。集中講義扱いにすると登録単位数に縛られれることが無くなるために、多くの学生が教育実践ボランティアに登録する可能性がある。そのことによって、学校現場からの派遣要請に十分応えることができない現状を改善することができる可能性がある。本来は単位登録に関係なく将来教職に就くことを目指している学生には、教育実践ボランティアに登録して欲しいが、そうもいかないのが現状である。単位登録をきっかけとして学校現場が抱えている課題等に直に触れることができる。また、子どもとの関わりを通して、自分自身が教職に向いているのかどうかの判断をするきっかけの場にもなりうる。教育実践ボランティアの体験が充実したものであったと感じた学生は、次年度以降にリピーターとして継続して教育実践ボランティアに参加している。

② 「教職実践演習（仮称）」として活用。

中央教育審議会（平成18年７月11日）は「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の答申の中で、教職課程の履修を通じて、教員として最小限必要な資質能力の全体について、確実に身につけさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認するため、教職課程の中に、新たな必修科目「教職実践演習（仮称）」を設定することが適当であると提言を行っている。更に、その目的として「教職実践演習（仮称）は、教職課程の他の科目の・・・・将来教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできることが期待される」としている。科目に含まれる事項として、次の４つの事項を提示している。①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力関する事項③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項④教科・保育内容等の指導力に関する事項。これらの項目を授業科目の中でどのように構成し実施するかは各大学の判断に委ねられている。

ここで、授業科目「教育実践ボランティア」が「教職実践演習（仮称）」の目的になりうるかについて、これまでの活動を振り返ってみた

ときに、十分なりうると考えるが今後さらなる検討が必要である。

最後に、将来教師を目指している学生にとって教育実践ボランティアに参加することによって、教師としての使命感や責任感、子どもに対する教育的的愛情を感じる機会になって欲しいものである。そのことによって、子ども理解と実践的指導力を持った「子どもの笑顔を引き出せる教師」として学校現場で頑張って欲しいものである。また、この教育実践ボランティア事業が、学校の先生方の要望に応えられるように更に充実発展させていきたいと考える。

〔引用文献〕

・文部省　1996　中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」

・文部省 1997　教育職員養成審議会第一次答申　「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」

・平田幹夫　1996　「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(1)

・平田幹夫　1997　「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(2)

・平田幹夫　教職研修　子どもから学ぶ「教育実践ボランティア」1997 教育開発研究所 vol25－11　80-84

・琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター　1998 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(3)

・琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター　1999 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(4)

・琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 2000 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(5)

・琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 2001 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(6)

・琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 2002 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(7)

・琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 2003 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(8)

・琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 2004 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(9)

・琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 2005 フレンドシップ事業報告書「子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(10)

謝辞

平成８年度に「教育実践ボランティア」事業が始まって、平成18年度で11年が経過しました。この事業が発展充実してきたのは、教育実践ボランティア実行委員としてこれまで頑張ってきた多くの学生の功績に寄るところが大きい。その実行委員だった学生が今、学校現場で中心となって頑張っている姿は頼もしい限りである。また、沖縄県教育庁、浦添市教育委員会,宜野湾市教育委員会、那覇市教育委員会、南風原町教育委員会、東風平町教育委員会、西原町教育委員会,沖縄市教育委員会、児童養護施設、そして、学生を受け入れてくださった小中学校の先生方及び子どもたちの御理解と御協力のおかげです。ここに深く感謝申し上げます。